

平成19年 12月3日	農作物病虫害発生予報 12月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
----------------	---------------------------------	----------------------------

～ 目 次 ～

予報の概要	1
予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	5
病虫害・農薬情報	
病虫害メモ	5
農薬メモ	6
参考(予報の見方、気象予報、12月のテレホンサービスの内容)	7

予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	平年並	やや多	前年並
	うどんこ病	平年並	やや少	前年並
	アブラムシ類	やや多	やや多	多
	ハダニ類	やや多	やや多	少
	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	前年並
アブラナ科野菜	コナガ	平年並	平年並	少

作物	担当者
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)
果 樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)
野 菜	岡田(病害) 畑中(虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

予報

【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや多	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は6.3%（平年1.5%）、発病株率は0.1%（平年0.03%）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか低く、降水量は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

< 防除のポイント >

ア ジカルボキシイミド系薬剤（スミレックス剤、ロブラール剤）は一部で、ポリオキシシン剤は広範囲で耐性菌が出現しているため、使用後は必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は使用を控える。

イ 耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤の連用並びに同一系統の薬剤間での輪用は避ける。

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	前年並	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は15.0%（平年26.7%）、発病株率は2.0%（平年4.6%）で平年に比べやや少なかった（-）。

イ 気象予報では12月の気温は平年並みか低い（±）。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

< 防除のポイント >

ア 発病前の予防または、発病初期の防除を徹底する。

イ 発生した場合、発病した葉を除去した後、薬剤防除を実施する。

ウ 耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤の連用並びに同一系統の薬剤間での輪用は避ける。

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.0%(平年30.1%)、寄生株率は12.1%(平年5.5%)で平年に比べやや多かった(+)

イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか低い(±~-)

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

局所的に発生することが多く、多発後の防除は困難なので、下葉の葉かきをこまめに行う一方、ほ場をよく観察して早期発見に努める。

<防除のポイント>

ア 開花期以降に薬剤散布を行う場合は、訪花昆虫に影響の少ない薬剤を使用する(日本バイオリジカルコントロール協議会HP(<http://www.biocontrol.jp/>)等を参考)。訪花昆虫の巣箱を施設外に出して薬剤散布を行う場合は、薬剤の影響が無くなってから巣箱を施設内に戻すようにする。

イ 発生が局所的である場合は部分散布を行う。また、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は25.0%(平年15.1%)、寄生株率は8.3%(平年3.9%)で平年に比べやや多かった(+)

イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか低い(±~-)

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

アブラムシ類の<耕種的防除等>を参照する。

< 防除のポイント >

- ア ナミハダニ(黄緑型)の発見が肉眼で困難な場合は、拡大鏡などで確認するか、葉裏に白紙を擦り付けて赤や薄緑色のハダニが潰れた痕跡の有無を確認する。
- イ その他については、アブラムシ類の< 防除のポイント >を参照する。

5 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	-

(2) 予報の根拠

- ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は10.0%(平年21.0%)、寄生株率は0.8%(平年1.5%)で平年並みであった(±)。
- イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか低い(±~-)。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

- ア 日光が差して気温が上昇してくると葉や蕾の食害を始めるので、ほ場をよく観察して捕殺する。
- イ 施設栽培では葉の裏や鉄骨パイプ等に産卵することが多いので、黄褐色の毛に覆われた卵塊を見つけ次第捕殺する。

< 防除のポイント >

アブラムシ類の< 防除のポイント >ア、ウを参照する。

アブラナ科野菜

1 コナガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	若齢幼虫時

(2) 予報の根拠

- ア 11月下旬の巡回調査では、キャベツでの発生ほ場率は16.7%(平年30.9%)、10株当たり虫数は0.6頭(平年1.4頭)で平年並みであった(±)。
- イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか低い(±~-)。

(3) 防除対策

< 防除のポイント >

ア 平成16年度に行った薬剤抵抗性検定において、有機リン系薬剤、ピレスロイド系薬剤、IGR系薬剤のコナガに対する効果は低い場合があり、BT剤やスピノエース顆粒水和剤、アファーム乳剤では高い効果が得られた。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	菌核病	平年並	やや多	前年並	5.0	1.0	発病果など発病部位を取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
アブラナ科野菜	ウワバ類	やや多	やや多	少	17 (ヶハツ)	16	日光が差す等、気温が上昇してくる(ハスモンヨトウで9以上)と食害を始めるので、ほ場をよく観察する。 収穫までに間があり、発生が確認された場合は防除を実施する。
野菜全般	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	少	33 (ヶハツ)	21	
	オオタバコガ	平年並	平年並	少	25 (ヶハツ)	21	

病害虫・農薬情報

病害虫メモ

害虫の薬剤抵抗性について

同じ薬剤を使用し続けることによって、害虫がこの薬剤に対する抵抗性を獲得し、防除効果が低下することがあります。また、同じ薬剤でなくても同系統の薬剤を使用することでも薬剤抵抗性のある害虫が発生することもあります。

農林総合技術センターでは、より効果の高い防除薬剤を利用してもらうため、薬剤検定を実施しています。

その結果、チョウ目害虫(コナガ、ハスモンヨトウ)における薬剤系統別の防除効果は、次の傾向が認められています。

BT剤は、コナガに効果が高く、ハスモンヨトウには効果が低い。

IGR剤は、コナガに対し効果が不安定ではあるが、ハスモンヨトウには効果が高い。

有機リン剤は、両種に対し効果が不安定である。

ピレスロイド剤は、両種に対し効果が低い。

ただし、例外もありますので、詳しいことは、平成19年10月18日発表の技術資料第6号を参考にしてください。
(専門研究員 畑中 猛)

農薬のラベル表示について

農薬の容器や包装に貼付されたラベルには、その農薬を効果的に、かつ安全に使うための必要不可欠な内容が記載されています。農薬をきちんと定められた方法で使用する事は、農薬を使用する上で最も基本的なことです。

ラベルに記載された具体的な内容は、登録された農薬であることを示す登録番号を始め、成分、毒物・劇物の表示、適用農作物名又は範囲、適用病害虫名・雑草名、使用量、希釈倍率、散布液量、使用時期、総使用回数、使用方法、使用上の注意、最終有効年月日など、関連する法律に基づく表示が義務づけられています。

さらに、安全上、特に注意を必要とする農薬には、「注意喚起マーク」が表示されています。

< 「注意喚起マーク」の例 >

「注意・警告マーク」

効果・薬害等の注意、安全使用上の注意 等

「行為の強制マーク」(必ず守ること)

マスク着用、メガネ着用、手袋着用、防除衣着用、厳重保管 その他

「行為の禁止マーク」(してはいけないこと)

河川流出禁止(魚介類注意) 桑園付近使用禁止(カイコ注意) かぶれる人使用禁止(カブレ注意) 施設内使用禁止 その他

初めて使用する農薬においては、事前にラベルを十分に読んで使用することは当然ですが、使い慣れた農薬においても登録事項の変更等により表示内容が変わっていることもよくあります。農薬を使用する前には、必ずラベルを読むようにしましょう。

(専門研究員 中川浩二)

参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（11月30日福岡管区気象台発表）

予報	低い(%) 少ない	平年並(%)	高い(%) 多い
気温	40	40	20
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

週ごとの気温傾向

予報	低い(%)	平年並(%)	高い(%)
1週目	40	30	30
2週目	50	30	20
3～4週目	30	40	30

3 12月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内容
上旬	12月の発生予報、イチゴ病害虫の防除、果樹類病害虫の冬期防除
下旬	カンキツ類の冬期防除、イチゴ病害虫の防除